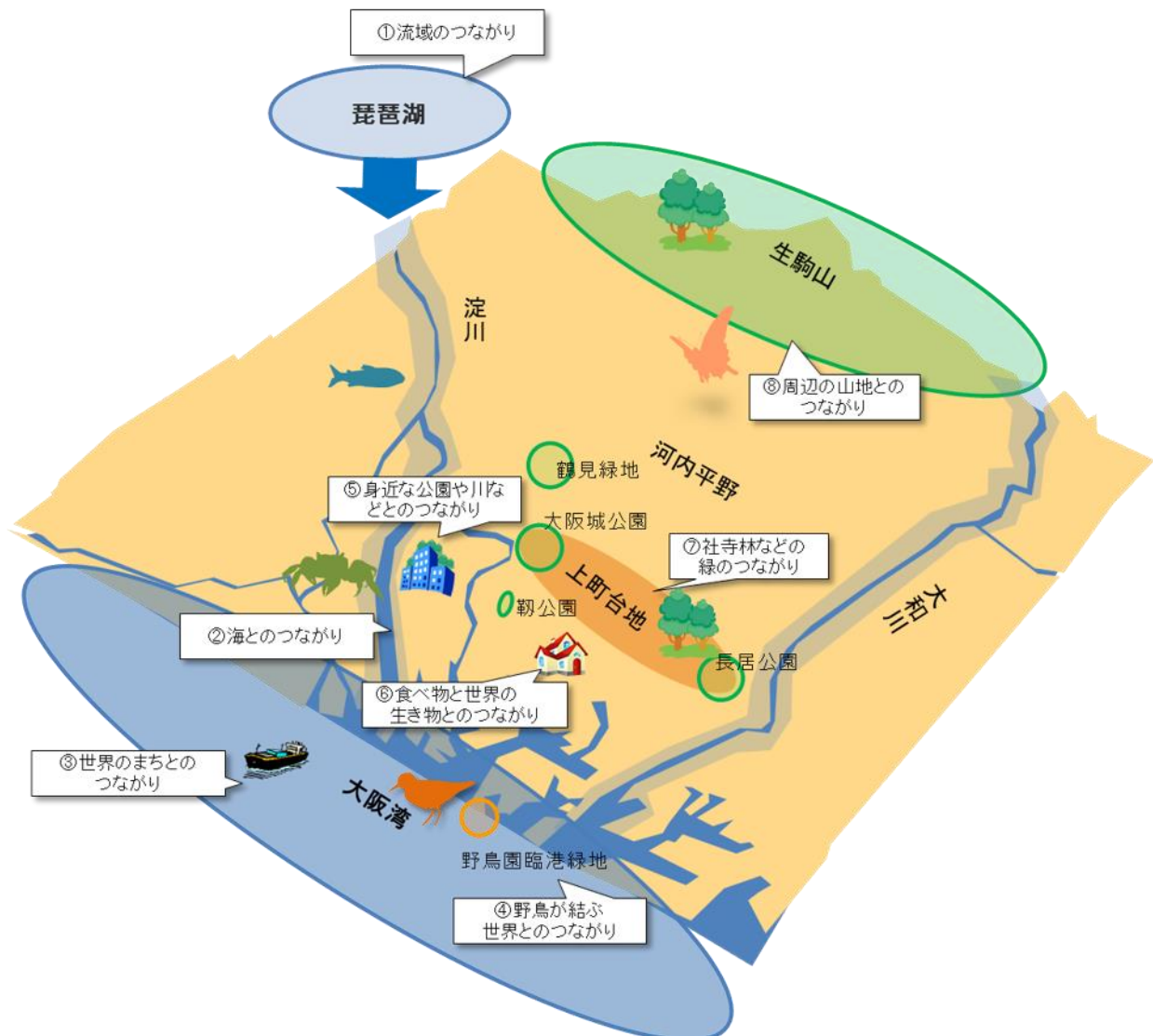


## (5) 大阪市と周辺エリアとのつながり

大阪市は、琵琶湖や生駒山、大阪湾といった豊かな自然に囲まれています。市内には、淀川や大和川、都心部を縦横に流れる川、大きな公園から小さな公園、さらには建物の緑といった大小様々な自然があり、これらの自然は、上流域とのつながり、周辺の山地とのつながり、さらには、海とのつながりなど、様々な「つながり」の中にあります。そして、私たちのまちは、このような「つながり」の一部となっています。

図6 大阪市と周辺エリアとのつながり



- ① 上流の森林が持つ水源かん養機能により、下流に住む私たちは水を利用することができます。
- ② 海水と淡水が混ざり合う汽水域には、その環境に特有の様々な生き物が生息しています。また、海で幼少時代を過ごし、川を遡上し成長するアユのような生き物もいます。
- ③ 世界中のまちから、日々、多くの農産物や木材、水産物などが運び込まれます。また、港などは外来生物の侵入経路ともなっています。
- ④ スズメほどの大きさの渡り鳥トウネンは、繁殖地シベリアと越冬地オーストラリアとの間の約12,000kmを旅します。野鳥園臨港緑地（もと南港野鳥園）は、このような渡り鳥にとって、大切な休息・採食場所となっています。
- ⑤ 建物の緑などの小さな自然にも、近くの公園や川辺などから生き物たちがやって来ます。
- ⑥ 私たちが日々の暮らしで消費する食料などは、「生物多様性の恵み」です。
- ⑦ 社寺林、公園や民間施設の樹木、街路樹などの緑のつながりが、生き物の通り道となります。
- ⑧ 生駒山など周辺の山々から、鳥や蝶などの生き物が飛んでくるかもしれません。

## (6) 生き物の現況

(i) 大阪市内の希少な生き物（詳細は資料編「大阪市内の生物相」を参照）

ほぼ全域が市街化された大阪市内にも様々な生き物たちが生息・生育しています。大阪市内（2017年度末時点）では、鳥類319種、魚類120種、昆虫類1,756種、維管束植物1,476種など、合計4,459種の生き物が生息・生育していると考えられます。これらのうち、鳥類61種、魚類32種、昆虫類249種、維管束植物155種など、大阪市内において個体数が少なく、保護すべきと考えられる在来種の556種を「保護上注目すべき生き物」として分類しました。

これらとは別に、かつては大阪市内で生息・生育していたものの、最後に確認されてから30年程度経過している、あるいは既知の生息・生育環境が完全に消失したと考えられるため、大阪市内ではすでに絶滅したと考えられる生き物が43種あり、このうち在来種の34種（外来の園芸種など9種除く）も「保護上注目すべき生き物」として分類しました。

生物多様性に関する正しい理解と保全活動を広めるためにも、区役所との連携をはじめ、自然とふれあう機会や場を創出すること、環境学習の充実、モニタリング情報等を集積し、発信することが必要です。

表2 大阪市内における保護上注目すべき生き物（総括表）

No.	分類群	市内で生息・生育記録がある生き物					
		生息・生育していると考えられる生き物			絶滅したと考えられる生き物（注1）		
				保護上注目すべき生き物		保護上注目すべき生き物	大阪市内の分布は人為によると思われるもの
1	ほ乳類	16	13	6	3	1	2
2	鳥類	324	319	61	5	0	5
3	爬虫類	11	9	6	2	2	0
4	両生類	7	4	2	3（注2）	3（注2）	0
5	汽水・淡水魚類	120	120	32	0	0	0
6	昆虫類	1,768	1,756	249	12	12	0
7	クモ類	100	100	6	0	0	0
8	陸産貝類	27	27	（注3）	（注3）	（注3）	（注3）
9	淡水産貝類	22	21	9	1	1	0
10	海岸生物（無脊椎動物及び藻類）	231	226	25	5	5	0
11	その他淡水産無脊椎動物	10	10	（注3）	（注3）	（注3）	（注3）
12	維管束植物	1,488	1,476	155	12	10	2（注4）
13	コケ植物	96	96	5	0	0	0
14	菌類	282	282	（注3）	（注3）	（注3）	（注3）
	合計	4,502	4,459	556	43	34	9

注1：大阪市内にかつて生息・生育していた記録が残っているが、最後に確認されてから30年程度経過している、あるいは既知の生息・生育環境が完全に消失したと考えられるため、大阪市内ではすでに絶滅したと考えられる種。

注2：近年一部地域で確認されたトノサマガエルは、人為的に持ち込まれたものであり、かつては大阪市内に生息していたものの、現在はすでに絶滅したと判断し、「保護上注目すべき生き物」として分類した。

注3：大阪市内の生息情報が少なく、データ収集と整理はできないため、生息状況の概要を示す。

注4：園芸的な植栽による維管束植物は、「保護上注目すべき生き物」として分類していない。

※詳細は資料編を参照

環境省や大阪府の絶滅危惧種が大阪市内にも住んでいると聞くと意外に思われる方も多いかもかもしれません。その多くは、普段の暮らしの中でお目にかかることは滅多にありませんが、昆虫の絶滅危惧種の中には、公園や住宅地で目撃される例も結構あります。ここでは、見つかる可能性のある絶滅危惧種のトンボとチョウをいくつか紹介したいと思います。

●トンボ

かつて湿地の環境が広がっていた大阪平野には、今でも多様なトンボ類が見られます。ナニワトンボ（環境省・大阪府絶滅危惧Ⅱ類）は、秋に多く見られる赤とんぼの仲間で、オスは全身が青色になるので、「青い赤とんぼ」としても有名です。各地で絶滅していますが、生息場所となるため池の多い大阪府では南部を中心に比較的生息地が残っています。移動力があるのか、これまでいなかった場所でも突然見つかることがあります。大阪市内でも公園の池などで見つかっています。

ほかにも、淀川下流のヨシ原で昔から生息が知られているヒヌマイトトンボ（環境省絶滅危惧ⅠB類・大阪府絶滅危惧Ⅰ類）や、オオサカサナエ（環境省・大阪府絶滅危惧Ⅱ類）、オオキトンボ（環境省絶滅危惧ⅠB類・大阪府絶滅危惧Ⅰ類）、メガネサナエ（環境省・大阪府絶滅危惧Ⅱ類）、ホンサナエ（大阪府絶滅危惧Ⅱ類）、キイロヤマトンボ（環境省準絶滅危惧・大阪府絶滅危惧Ⅰ類）などが淀川沿いを中心に発見されているので、近くの公園や住宅地にもやってくるかもしれません。



ヒヌマイトトンボ  
絶滅危惧Ⅰ類  
写真：森岡賢史撮影



ナニワトンボ  
絶滅危惧Ⅱ類



オオサカサナエ  
絶滅危惧Ⅱ類  
写真：武田啓子撮影

●チョウ

ツマグロキチョウ（環境省絶滅危惧ⅠB類・大阪府絶滅危惧Ⅰ類）は、かつては淀川河川敷などに普通に見られたと考えられている草原を好む小型のチョウで、長い間、府内ではほとんど見られませんでした。2015年頃から大阪市内各地で目撃が相次いでいます。淀川や大和川の河川敷のほか、住宅地で見られることもあるようです。このチョウの幼虫が食べるカワラケツメイという植物は見つからないので、どこで発生しているのか謎のままです。

このほかにもかつて大阪市内でも見られたシルビアシジミ（環境省絶滅危惧ⅠB類・大阪府絶滅危惧Ⅰ類）というチョウは、最近、伊丹空港周辺に多数生息することが発見されています。よく探すと淀川や大和川沿いなどでも再発見されるかもしれません。

絶滅危惧種を見つけることは、生物多様性を守ることに繋がります。皆さんもぜひ身近で絶滅危惧種を探してみましょう。



ツマグロキチョウ  
絶滅危惧Ⅰ類  
写真：上田昇平撮影



シルビアシジミ  
絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅰ類  
大阪府内において  
絶滅の危機に瀕している種  
絶滅危惧Ⅱ類  
大阪府内において  
絶滅の危険が増大している種  
準絶滅危惧  
大阪府内において  
生存基盤が脆弱な種

出典：大阪府レッドリスト 2014

(ii) 大阪市内で確認されている外来生物

もともと自然状態では分布していなかった地域に人間によって持ち込まれ定着した生物のことを「外来生物」といいます。

都市においては、生存競争の相手が少ないこともあり、港などの侵入経路から外来生物が定着しやすい環境にあります。大阪市内でも、様々な外来生物が確認されています。外来生物には、ペットや園芸種として持ち込まれた種が放棄・放流されたものもあります。

(iii) 大阪府内の生物多様性ホットスポット

大阪府が作成した「大阪府レッドリスト2014」では、日本固有種を含め希少な野生動植物が生息・生育し、種の多様性が高い府内の55か所を、生物多様性の保全上特に重要な場所として「生物多様性ホットスポット」に選定しています。Aランクは広域的な観点で見ても特に重要な場所、Bランクは府域レベルで、代替ができない場所、Cランクは市町村などの地域レベルで重要な場所が選定されています。

大阪市内では、Aランクが3箇所（淀川ワンド群（城北など）、淀川汽水域、野鳥園臨港緑地（もと南港野鳥園）・夢洲）、Cランクは2箇所（上町台地、大和川堤防）が選定されています。

● 淀川ワンド群（城北など）（図7：⑱）

淀川本流に面した池のような水域をワンドと呼びます。かつては淀川本流沿いに500を超えるワンドが存在していましたが、1970年代以降の河川改修によりその大半が消失しました。現在、いくつかのワンド群が残存している状況で、大阪市内では、城北に淀川最大規模のワンド群が残されています。また、対岸の豊里にもワンドが見られます。

これらのワンド群には、シロヒレタビラ、カワヒガイ、ヨドゼゼラなど数多くの淡水魚、イシガイやトンガリササノハガイなど、希少な淡水二枚貝が生息しており、国の天然記念物のイタセンパラの生息地としても知られています。

ワンドスゲやドクゼリなど希少な水辺の植物も多く、ヨシ原にはツバメの集団ねぐらも形成されるなど、多様な生き物を育む豊かな生態系が形成されています。しかし、近年はオオクチバスやヌートリアが増加するなど、外来生物の影響が問題となっています。



城北ワンド



ヨドゼゼラ



イタセンパラ

●淀川汽水域（図7：⑱）

淀川大堰から河口までの約10kmの範囲は、潮汐の影響を受け、河川水（淡水）と海水が混じり合う汽水域となっています。かつては川岸に干潟やヨシ原が広がっていましたが、高度経済成長期の地盤沈下などの影響により、その多くは失われました。現在は十三付近に干潟とヨシ原が見られ、中津地区にもヨシ原が連なっています。また、柴島と海老江には、近年人工干潟が造成されています。

干潟には、アシハラガニやヤマトオサガニ、カワザンショウガイ、ヤマトシジミなどの生き物が生息し、渡りの季節には様々なシギ・チドリ類がやってきます。また、ヨシ原周辺には、シオクグやウラギクなどの塩生植物も見られます。特に、十三のヨシ原は、大阪府内で唯一のヒヌマイトトンボ生息地になっており、チュウヒの繁殖地・生息地としても重要な場所です。

水域には、海と川とを行き来するニホンウナギやアユをはじめとした多くの魚類が生息しています。



十三干潟のヨシ群落



ニホンウナギ



アユ

●野鳥園臨港緑地（もと南港野鳥園）・夢洲（図7：㉔）

1970年代に大阪湾岸の埋立てが急速に進められていた頃、南港埋立地に広大な水たまりが広がり、干潟に生息するシギ・チドリ類が多数集まるようになりました。その生息環境を守ろうという動きの中で、大阪南港野鳥園（現在の野鳥園臨港緑地）が開園しました。

野鳥園臨港緑地（もと南港野鳥園）には干潟や裸地、ヨシ原が形成され、春と秋の渡りの季節には数多くのシギ・チドリ類が見られます。シロチドリやハマシギの渡来数の多さから、「日本の重要湿地500」などにも選ばれています。ここには鳥類だけでなく、ウスコミミガイやヒナユキスズメなど希少な海岸生物も確認されています。

野鳥園臨港緑地（もと南港野鳥園）のほか、近年では夢洲や海岸の裸地においても、初夏にはコアジサシやシロチドリなどの渡来が確認されています。また、ベニアジサシも確認されています。

冬期は、ツクシガモなど希少種を含む多数のカモ類、チュウヒやハイイロチュウヒ、コミズクなどの猛禽類の越冬地にもなっています。



野鳥園臨港緑地



チュウヒ  
写真提供：野鳥園臨港緑地



コアジサシ  
写真提供：野鳥園臨港緑地

●上町台地 (図7: ㉑)

上町台地には、北端の大阪城公園のほか、社寺林、天王寺公園、帝塚山古墳、長居公園、大阪市立大学と市内中南部を南北に貫く緑地帯が形成されています。西側が切り立った断層で東側がなだらかに下り、各所に谷があるなど、現在でも、自然の地形が道路の曲線や高低差として残っています。

地下水位の高い上町台地の斜面緑地では、エノキ、ムクノキなど古くからの樹々が残存しているほか、それらの陰で生育するイヌビワの実生などが見られます。



生玉公園



イヌビワ



エノキ

●大和川堤防 (図7: ㉒)

藤井寺市、八尾市から松原市、大阪市にかけての大和川堤防は、古くから管理された草地在が広がり、ツルボ、カンサイタンポポなどが豊富に生育し、近畿地方でもこの一帯に限られるヒキノカサなどの植物が生育しています。

古い堤体には、土壌水分に応じてセイタカヨシやクサボケなどの群落が見られ、これらに応じてカヤネズミや様々な昆虫などが生息するなど多様性の高い環境となっています。一方で、堤防工事により改変した場所にはセイバンモロコシなどの外来植物が占有しているところもあります。

なお、大和川河口部にはカモメ類、カモ類が集まっています。



大和川

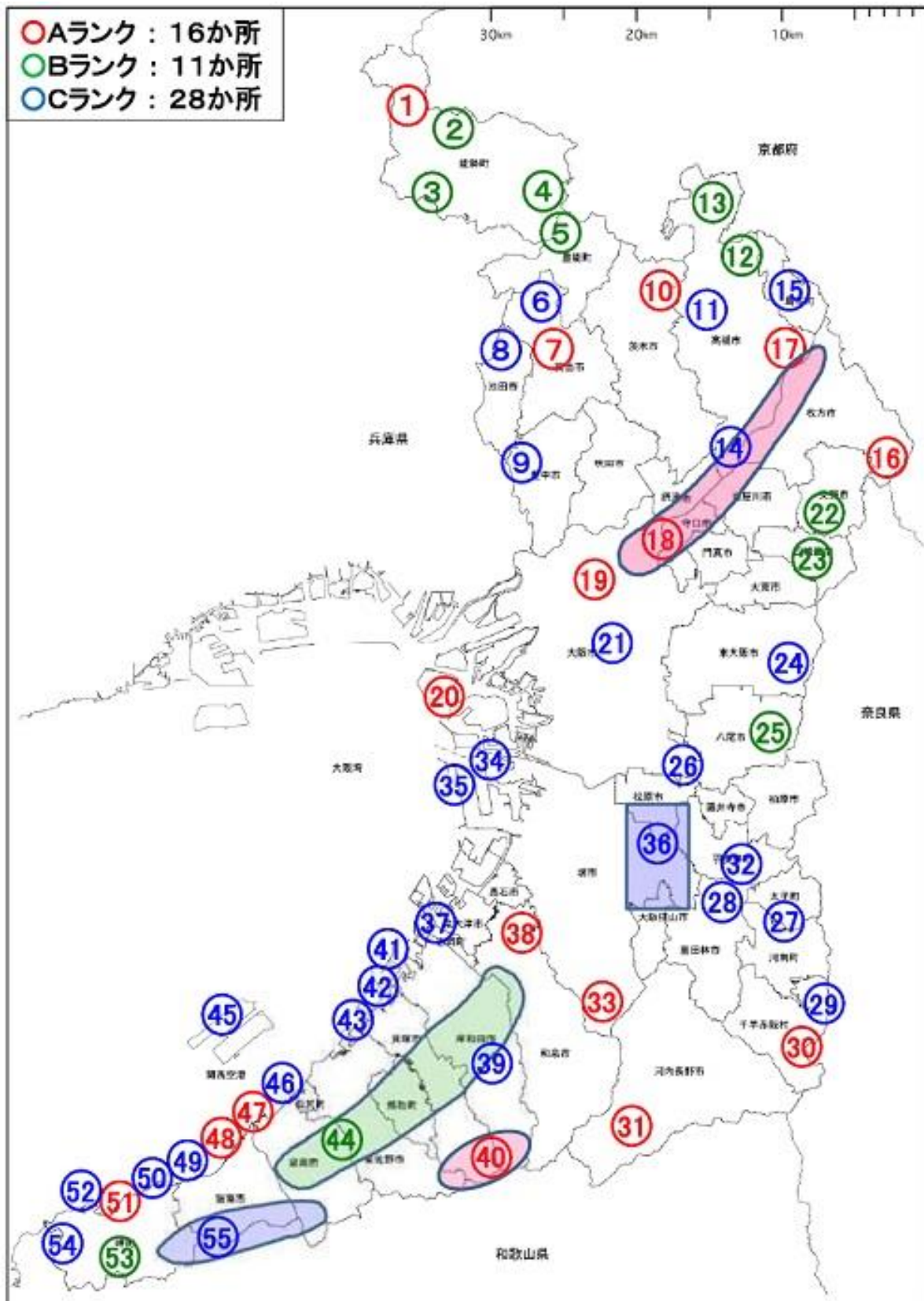


カンサイタンポポ



カヤネズミ  
(大阪市立自然史博物館展示標本)

図7 大阪府内の生物多様性ホットスポット



注) 絶滅危惧種の種類の多い場所から順にAランク、Bランク、Cランクに位置付けられています。

出典：大阪府レッドリスト2014